

イエイツ・カントリ・巡礼記



大浦 幸男

ニューヨークのアイドルワイルド国際空港を離陸したのが、一九六三年四月二十七日午後九時。飛行機はアイリッシュ・エア・ウェイズである。アイルランドのナショナル・カラーは緑だから、機内は緑一色、スチュワーデスの制服からエア・バッグに至るまで、すべて緑一色だ。満員の乗客をのせて飛び立ったジェット機は、ふつうは大西洋をひとびに渡るのだが、ちょうど土曜日であったので、一度ボストンまで北上して、それから大西洋を横断するのである。ボストンを離陸したのが午後十一時頃。上空に達して、「ベルトを締

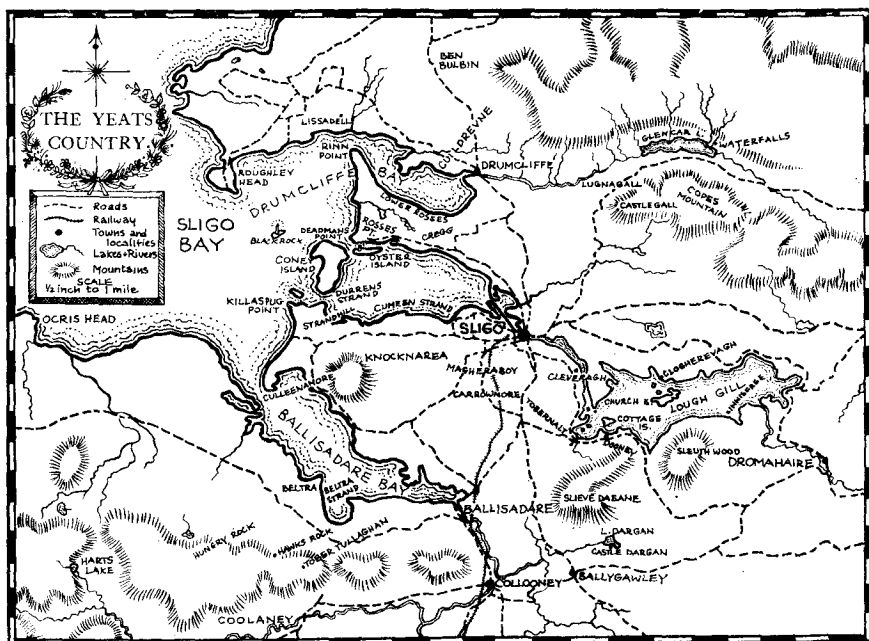
めよ」のサインが消えると、すぐにスチュワーデスが飲みものの注文を聞きにくるので、アイリッシュ・ウイスキー・アンド・ソーダをたのむ。アイリッシュ・ウイスキーというのは、ブランドイに似た香気をもち、なかなか口当りのよい酒である。それから、ビーフステーキ・ディーナーが出て、食べ終ると、ほぼ十二時に近い。十二時になると、アナウンスがあつて、アイルランド時間では今午前五時だ、というから、時計の針を六時間すすめる。ほどなく夜が明け、大西洋の上空は太陽がギリギリ輝いている。といったぐあいだ、夜行便を利用して、ゆっくり寝てゆこうと思つたのが、完全にアテが外れ、ウトウトする間もなく、朝になつてしまった。大西洋横断の正味の飛行時間はわずか五時間だから、こう航空機が進歩すると、夜行利用も困難となり、有難いのか、有難くないのか、わからなくなる。さて、ほどなく、朝食というわけで、食事の方は、腹がへろろが、へるまいが、容赦もなく運んでくる。予定より少しおくれで、午前十時半アイルランド西海岸のシャノン空港着。上空では日光が照りつけていたのに、飛行場は雲がたれこめ雨が降っていた。税関も簡単で、通貨の両替もすぐすんだが、いよいよイエイツの塔のあるゴート (Goat) まで行く方法が問題であつた。飛行場の名前になつてゐるシャノン (Shannon) というのは、アイルランド最大の川の名で、東

から西に二四〇マイル流れて大西洋に注いでいるが、その川が三角江にひろがるあたりに、リメリック(Limerick)というかなり大きな町がある。これが、飛行場からは一番近い町で、そこから鉄道が一本、アイルランドの西部平原を縦断して、スライゴオまで通じている。ところが、その鉄道たるや、一日に一往復で、北行は、リメリック午後三時半発のが一本あるだけ、というのんびりさである。それでは、バスはというと、目下ストライキ中で、アイルランド全土にわたってすべてのバスが運行中止だそうである。しかも、これがすでにもう一月もつづいていることだから、アイルランド国民は、足をうばわれても、たいして困らないらしく、これまたわれわれには想像もできないのんびりさである。そこで、

仕方がないから、タクシーを走らせて、四〇マイル離れたゴートに向う。自動車は二台ようやくすれ違える程度の田舎道だが、よく舗装されている。道の両側には無雑作に積み重ねた石の低い垣をへだてて、牧場がつづいている。新緑の牧場は、雨にぬれて緑の色がひとしお濃い。アイルランドのナショナル・カラーが緑というのも、なるほどと実感がわく。見わたすかぎり、畑はまったくなく、一面の牧場で、ところどころに羊や、牛が、草をはんでいる。その牧場の緑のなかに鮮かな黄色の花をつけた灌木のしげみがある。運転手にきくと、gorse だと答える。しかし、そののち別の人にきいたら、fuzze といっていた。これが、まるで原色の緑のカンパスに黄色の絵の具をバラまいたように、アイルランドの田舎を色

彩っているのである。それへ、石造の家を描き、羊や牛を若干書きこめば、アイルランドの田園風景の絵ができあがる。まったく泰西名画さながらの美しい景色に、汚ないニューヨークからやってきた私は、感嘆おく能わず、アイルランドは美しいと、運転手にいくたびも語りかけるのであった。

正午すぎ、ゴートのグリンズ・ホテルに到着。三階だての小さいホテルで、ホテルよりはインという感じがする。主人のオブライエン氏は、キチンと品よく背広を着こんだ老紳士で、自らもイエイツや、グレゴリー夫人の研究家だそうである。私もイエイツの研究をやっており、そのためにはなるばる日本からやってきたというと、大いに喜んで歓迎してくれ、ホテルのロビーに飾ってある数多くのイエイツの写真や、文献、弟のジャック・バトラー・イエイツのかいた絵、今は焼失したグレゴリー夫人の旧邸の写真などを見せてくれた。しかし、何しろ昨晚はほとんど眠っていないので、まず昼寝ということにし、四時ごろまで、ベッドで眠る。四時すぎに食堂にゆき、ティーをとるが、これがチキン、ハム、パンに紅茶というハイ・ティーである。それからホテルを出て、ゴートの町を散歩する。これは、町というよりは村で、どちらを向いて歩いても、二三丁もゆくと、村外れになる。まず鉄道の駅にゆく。前に書いたリメリックからスライゴオへゆく鉄道が、この村を通っているのである。しかし、何しろ一日にスライゴオ行きが一本と、ゴールウェイ行きが一本という閑散ぶりだから、駅には、駅長さんが一人、出札掛、切符きり



兼業で、駅の構内に住みこんでいるのである。私が翌日の汽車の時間について質問すると、訛りの強い英語で、若い駅長さんはいねいに答えてくれた。それから、スクエアーという村の広場にもどる。十七、八歳の村の娘さんが三人、お喋りしながら歩いてくる。赤茶けた髪に、青い眼のクリクリした円顔で、三人がほとんど同じような顔をしている。典型的なアイルランドの田舎娘らしい。その三人が、好奇心に眼を輝かして、じーと私の方をすかし見る。が、私が視線をむけると、三人ともサッと真正面を向いて、おすましして歩きつづける。こんなようすは、何となくひなびて可愛らしい。ニューヨークの舗道を歩いていると、どんな人が歩いていようが、皆われ関せずだ。その点、旅行は田舎に限る。大都会は世界中どこでも大差なしである。村の広場をすぎて、今度は反対側の村外れに出る。そこには、石造のみすぼらしい長屋が並んでいる。始めは倉庫かと思ったが、幾家族もが、一つづきの長屋に住んでいるらしい。ドアが一つに、窓も小さく、室内はうす暗い。一軒毎に屋根から煙突が出ており、ちょうど夕食の仕度をしているらしく、炊事の煙があわく立ち上っている。わずかに牧畜だけで暮しているアイルランド西部の田舎は、ほんとうに貧しいという感じがする。春という四月末のこの頃でも、このようにわびしいのだから、大西洋の西風がはげし

く吹きつける冬季数カ月のきびしさは、まったく想像に余りある。そんな物思いにふけりながら、ホテルへの道をたどる途中、村人とすれ違う。すると、必ずグッド・イブニングと声をかけてくるのだ。まったくのストレンジャーである私にまで挨拶をするのである。何という人なつこい国民であらうか。アイルランド人といえば、シングの劇などによると、オッチョコチョイの碌でなしということになっているが、今度の旅から受けた私の印象では、純粋でひどく親切な国民ということであった。今この稿を書きながら、私は、アイルランド国民にたいする親愛の情がふたたび燃え上り、胸ふくらむ思いを禁じえないのである。

翌四月二十九日は、イエイツの塔と、クルールの湖水を訪れる日だ。午前八時半起床、英国風の肉の厚いベーコンの朝食をすませて、待っていると、ホテルの主人の紹介で、案内の老人、オサリバン (O'Sullivan) さんがやってくる。直ちにタクシーで、村の東方三、四マイルのところにあるバリリイの塔に向う。牧場のあいだの小道を自動車は進んでゆく。このあたりの土地はやせているので、耕作には適しないらしい。ほどなく平野のまん中に、余りにも突然に塔があらわれる。私はひそかに、山間の溪流のそばにそそりたつ苔むす古塔を想像していたのだが、想像とはまったく違って、平野の牧場のまん中にあるノルマンの塔の廢墟——それが、イエイツがあるいは、バリリイ塔、あるいは、バリリイ城と呼び、自分の魂の象徴だと考えていた塔だったのである。塔のそばには、

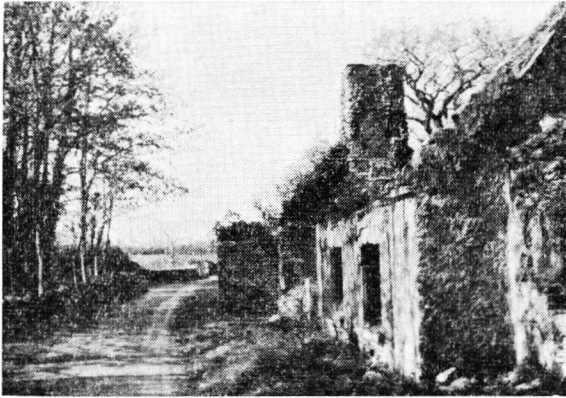
石造の家の廢墟らしいのが一つ残っているだけであった。オサリバン老人は、私を誘って、まず塔の一階には入る。今は荒れはてて、完全に無人の廢墟である。よくこんなところに住めたものだと思う。一階の南側には比較的大きな窓があり、窓の下を小川が流れている。右手には、眼鏡型の橋があり、この上を、今自動車でやってきた道が通っているのである。この小川のことはイエイツの詩にもよく歌われているが、きれいな清流が塔の前をサラサラと音をたてて流れていた。なお、八五頁の標題のところに塔の写真をかかげておいたが、これは眼鏡橋の上より筆者が撮影したものである。塔の南側が写っており、その下を清流が流れているのである。塔そのものは、イエイツの死後二十四年の現在では、窓枠などは一切壊れ落ち、内部には木材はまったく見られない。壁も床も、石のままで、それも荒れ放題になっている。塔は四階で、各階はおよそ二間四方ぐらいの部屋が一つあるだけだ。塔の隅に石造の小さな廻り階段がついている。二階が比較的部屋の体裁を残しており、大きな暖炉がある。三階の天井、つまり、四階の床は完全に脱落して、三、四階がつづいている。狭い急な廻り階段を身をかめて屋上までのぼる。だが、屋上に脱げると、思わずアッと叫ぶ。実に素晴らしい眺望だ。東も、西も、北も、南も、一面に緑の平野がつづいている。ここで始めて、イエイツがこの塔を愛し、ここにいと最良の詩が書けるといった、その理由がわかったのである。イエイツが詩『塔』のなかで

胸壁のうえを歩みつつわたしは眺める
家の礎や、樹木が大地より爆けた指のように生えてい
るあたりを

と、うたった同じ塔の屋上を、今私も歩
いているのだ、と思うと、ひとしお感無
量で、しばし飽くことなく四方を眺めた
のであった。しかも、その屋上の胸壁
は、今はところどころ壊れ落ちているの
だ。イエイツの死後、塔はふたたび元の
荒廃に戻りつつあるのだ。かくて私は、
塔の屋上で、歴史の悠久の時間と、ひと
りの詩人の一生を思いつつ、しばしの感
慨にふけたのであった。

待たせておいた自動車に乗って、案内
の老人と共に、次はグレゴリイ夫人の邸
址と、クルル湖にゆく。共に、南へわず
か三マイルほどのところにある。イエイ
ツがたびたび訪れたグレゴリイ夫人の別
荘は、写真によると、三階建てのがっし
りした建物だが、今は焼失し、わずかに

既だけが残っている。しかし、菜園のなかに一本の大樹があ
り、それには夫人の邸宅を訪れた文人たちが、小刀で自分の
名前のイニシャルを刻みこんでいて、これが昔を偲ぶ貴重な



旧グレゴリイ夫人邸の概

記念品となっている。その中には、W・B・Y（イエイツ）、
G・B・S（シヨオ）A・E（ジョージ・ラッセル）などの
サインが見受けられる。それより徒歩でさらに南へ約五分ば
かり、低い木立ちのあいだを歩いてゆくと、道は豁然と開け
て、クルルの湖水に達する。クルルも

また、想像に反して、広々とした大きな
湖水であった。「クルルの野生の白鳥」
の詩から、私は山あいのさびしい池を
想像していたが、それは決して池では
ない。平地にひろびろと水をたたえた
湖水である。アイルランドは、雨の多
いためか、このような湖水が数多く
ある。しかも、中部のこのあたりには、
高い山や、深い森林がないから、幽邃
という感じはまったくない。だが、こ
の広い湖水に人影はまったくなく、正
午近い日光の下に、水面は森々として
白く輝くのみであった。かすかなざざ
波が湖岸にたえず打ちよせている。岸
には砂浜が少しあり、その上手の石の
浜には、湿地帯とみえて、苔が一面に
はびこっている。その外側の木立ちは原生林らしく、幹の曲
りくねった低い樹木が入り錯って生えている。この湖水はほ
とんど訪れる人もないらしく、荒涼たる湖畔の木立ちの感じ

が、イエイツの詩、『クール莊園とバリリイ、一九三一年』のなかによく出ている。

その湖畔には　ひとむれの木立ち

今はすっかり枯木となつて　冬日に照らされている

その山毛櫸の林のなかに　わたしは立っていた

この詩のなかではまた、「靈魂さながらに視界のなかへ飛び来り、また朝の景色のなかへ翔け去っていく」白鳥がいた。『クールの野生の白鳥』の詩でも、湖上には五十九羽の白鳥が浮んでいた。ところが、今日は白鳥は一羽もない。ぜび白鳥を見たいというと、案内の老人は先きに立って、ドンドン歩いてゆく。しかし、行けども、行けども、同じ景色で、白鳥の姿はまったく見えない。他の鳥も見えず、人影としては、湖岸を歩く二人だけだ。もう引き返そうというと、老人は心から気の毒そうな顔をする。七十四歳だという老人は決してただのガイドではない。どういう職業に就いていたのか、遠慮して聞かなかったが、妻子はなく、妹と二人住いだという。洋服は袖の切れかかったホームスパンを着、ネクタイもしていない。その上には、よれよれのホームスパンのオーバーを着ているが、正確な英語を話し、イエイツや、グレゴリー夫人には心から尊敬をはらっている。そして、遠い日本のプロフェッサーの案内ができるのは自分の光栄だと、青い眼を輝かせて話すのである。正午すぎホテルへ帰り、老人

を昼食に誘うと、うれしそうにそれに応じる。さすがカトリック国らしく、食前の祈りをしてから、老人は食事始める。チキン・スープに始まり、牛肉、ハムなどの盛り沢山な田舎料理だが、老人はいかにも美味しそうに、なめるようにすっかり平らげる。今日は天長節ということを思いだして、その旨つげると、私の手帳に April 29th 1963, Emperor's Day, God Bless Him と、記念にサインしてくれた。食事をすませてからすぐに、駅まで、荷物があるので、タクシーを走らせる。老人も駅まで見送りにきてくれた。アメリカで一カートン買ったセイラムというはっか入りの煙草が美味しいといっていたので、二箱進呈すると、こんな高価なものは、とても頂けません、といって、いく度も辞退する。アメリカでは煙草は二十本入り三〇セント前後だから、他の物価から比べると、煙草はひどく安い。英国や、アイルランドでは、煙草の税金が高いために、十本入りが二志六片ぐらいする。だから、四十本の煙草はかなりな値段になるわけだ。しかし、相好をくずして悦ぶ煙草好きの老人の顔を見ると、どうしてもやりたくなるのである。老人は押しただくように受けると、今度は、まずいけれど for a change にといって、吸い残りのアイルランド煙草を一箱私にくれる。こうなると、人種を超え、国家を忘れて、言いえぬ親しみがわいてくるのである。そうこうするうちに、二時二〇分着の汽車が、定刻を十五分ほど遅れて、ようやく到着する。私が乗りこみ、車窓から手をさしだすと、老人は私の手をかたく握り、"Good

“Luck, Yukio”と、ただ一言。その目は、思いのほか、うるんでいようであった。そして、そのままクルリと振り向くと、汽車の発車をも待たず、立ち去っていった。わずか五時間の出会いに過ぎなかったが、最後に私のファースト・ネームを呼んで別れていったオサリバン老人は、アイルランド旅行中に会った忘れがたい人のひとりであった。ヨレヨレのオーバーを着た老人の孤独な後姿を見守っているうちに、汽笛もならさず、いつしか汽車は動きだしていた。この田舎の小駅から乗りこんだのは、どうも私一人であつたらしい。

晴れ上った午後太陽の下に鮮かな緑色に輝く牧場のあいだを、汽車はヒタはしりに北へ向う。ディーゼル機関車らしく、煤煙はない。五輦ほどつないでいるが、どの箱もガラあきで、私の乗った二等車の車室も、二十歳ぐらいの青年が一人いるだけだった。郵便局につとめているというその青年は、私が日本から来たという、日本の工業力はすばらしいそうだが、などと、好奇心をもやす。私は、日本製のムービー・ハミリヤ、小型カメラを彼に見せてやる。アメリカにいるあいだは、それほどにも思わなかったが、大西洋をわたって、アイルランドになると、日本は遠くなりけり、という感じが急に強まる。地球の反対側という感じがしてくるのである。しかし、私の会ったアイルランド人は、すべて人なつこい、どこか日本人に似た人たちばかりであった。ぜひ日本へ来なさいよ、という、日本へはともに行きたいが、何ぶん遠すぎてと、皆あこがれの眼ざしをするのであった。

約一時間で、汽車はゴールウェイに到着する。西海岸中部の最大の都会である。シングの紀行文で有名なアラン島は、ここから西の方、便船で三時間の海上にある。二十年ほど前に、私はアラン島のすばらしい実写映画を見たことがあり、アラン島はかねあこがれの土地であったが、何しろ限られた日程のために訪れることができなかったのは残念である。またゴールウェイから北へ、海岸より旅すると、メイヨ郡など、シングの劇に出てくる村むらを通ることになるが、これまた、バス・ストライキのために行くことができなかった。そこで、ゴールウェイは、ただ駅前を見るだけにして、直ちに汽車で引き返し、途中アセンリイで乗りかえて、北方の港町スライゴオに向った。アセンリイ発、午後五時半。汽車が次第に北に向うにつれ、一面の緑の牧場のなかへ、濃褐色の苔が増えてくる。岩地も多く、いかにも不毛の湿地帯らしい。太陽もようやく西に傾き、荒涼たる北国の感じが次第に強まってくる。北に向って、汽車が走るにつれて、乗客は次つぎに下りてゆき、最後は、私の車輦には私一人になってしまった。しかし私は元来、荒涼たる北国にアこがれていたもので、昏れてゆく北国の風景を、車窓より飽くことなく眺めていた。終着駅スライゴオには午後八時半到着。あたりはまだ明るい。すぐホテルにゆき、冷肉とビールで食事をすませた後、町を散歩する。九時半というのに、まだ微光が残っている。イエイツのいう「ケルトの薄明」とは、こんなに長いものかと、今さらに実感したのであった。四月末というのに、風は冷た

く、春のたのしさは、まだこの北国を訪れていないらしい。道ゆく人の数も少なく、皆まだオーバーを着ている。町のまん中を川が流れ、それが海へ注いでいる。橋の欄干にもたれて、白く昏れ残る水面を眺めると、そこには思いもかけず、白鳥が数多く浮んでいた。

翌四月三〇日午前十時、かねて紹介のあったミス・ナイルランド (Niland) を市立図書館に訪問し、午前中国書館所蔵のイエイツ文献を見る。正午頃より書店経営のキョーハン (Keohane) 氏の案内でイエイツゆかりの地を一巡する。なお、このスライゴオには、イエイツ・ソサエティーの本部があり、毎年夏に二週間、英米のイエイツ学者を招いて、イエイツ・サマー・スクールが行われるのである。イエイツ・ソサエティーの会長は、ケンブリッジ大学のT・R・ヘン氏であって、

私はこのアイルランド旅行の後、英国でケンブリッジを訪れた際、同氏の好意により、同氏が現在学寮長をしているセント・カザリン・カレッジの客として、二日間を過ごすことができたのであるが、スライゴオでも、同氏の口添えにより、イエイツ・ソサエティ



ーの人たちが至れりつくせりの案内をしてくれた。お蔭で、

わずか二日間の滞在であったが、見るべきところはすべて見ることができたのである。(八七頁地図参照)

さて、キョーハン氏運転の自動車は、まずドラムクリフのイエイツの墓地に向う。町の北方約十五分ほどで達する。イエイツは一九三九年に南フランスで客死したが、一九四八年に、彼の生前の希望どおりに、この教会の墓地に彼の遺体に移されたのであった。『ベン・バルベンの麓にて』という詩の終りで、イエイツはこういつている。

イエイツの墓碑(上)と
ドラムクリフの墓地(右)

バルベン山の裸かの頂き
の下

ドラムクリフの墓地にイエイツは横たわる。

彼の祖先はずっと昔その牧師であった

その教会はすぐそばにあり

道のそばには古い十字架がある。

大理石も無用、ありきたりの文句も不用

この土地の近くで掘りだされた石灰岩の上に

彼の命により次の言葉が刻まれている

冷やかな眼を投げよ

生へ、死へ。

騎り手よ、過ぎゆけ！

まさに彼の遺言どおり、イエイツの墓には、「冷やかな眼を投げよ」以下の三行と、彼の名前と生存の年月日が刻まれているだけであった。墓石の石灰岩は、花崗岩によく似た石であった。墓地は教会の正面のすぐ左手にあり、その背後には木の間に、バルベン山が見える。曇り日のために写真にはうまく出ていないが、バルベン山は、平らな丘陵が急にたち切られたような特異な姿をしており、この地方のランドマークなのである。この日は朝来、雲は低く、今にも雨が降り出しそうであったが、この教会の墓地には、他に訪れる人もなく、うす暗いしじまのなかに、ただ、からすのような鳥の鳴き声が聞えているだけであった。

ドラムクリフから、自動車は、東に向い、山脈を左手に見て、それに平行して走る。この山脈の西端の急に切り立ったあたりが、ベン・バルベンになるのである。この山脈は、高さ六百メートルぐらいの丘陵だが、崖のような峻険しい岩肌を見せている。そのところどころに縦に裂けた大きな亀裂があり、そのあるものには地下水が流れだして、滝を作っている。

る。こういう光景が、イエイツの詩にも出てくるのである。

こうした丘陵にはさまれた盆地のなかに、グレンカー湖という美しい湖水がある。約十五分で、俾はその湖畔に達する。

折しも雨がポツポツと降りだし、湖水は北国らしい荒涼たるさまを見せる。古いお城の廢墟のある湖畔の道を自動車はさらに奥へと進み、湖水を一周し、帰りは反対側の丘陵の中腹をとおって、スライゴオに帰る。緩かな丘陵のすがすがし、一望のもと海までつづいているあたり、すばらしい眺望だ。

グランド・セントラル・ホテルというスライゴオ最大のホテルで、キョーハン氏は、昼食を御馳走してくれた後、小雨のなかをふたたび愛車を駆って、見物につれていってくれる。今度は、スライゴオからは西南にあたるギル湖(Dough Gill)にいった。この湖水はすいぶん大きくて、一周するのに、自動車でもかなり時間がかかる。少し風が出てきたとみえて、広い水面は波立っている。この湖水に小さい島がいくつあるが、その一つが、有名なイニスフリーの湖島である。岸からは百メートル余りで、ボートでも簡単に行けそうである。しかし、湖岸から見ると、こんもりと樹木におおわれているので、はたして小庵をきずく林間があるか、どうか、疑問である。もっとも、あの詩は、ロンドンにいたイエイツが郷愁にかられて作ったもので、彼がイニスフリーで、ソローのように林間の生活をしたわけではない。ともあれ、このギル湖は、水の美しい、明るい感じの湖水だから、夏には良いキャンプ地となるそうだ。イニスフリーの詩が有名になったため

に、この日は小雨のふる恵天候であつたにも拘らず、この湖畔には観光客らしい男女が自動車をとめて、記念撮影をしていた。また、この湖水の別の小島に、ひとりの老人がただ独り数年間住み、二年前にそこで亡くなったということである。双眼鏡を借りて、のぞくと、たしかに石造の家が残っていた。それから、Dronahire や、Dooney など、イエイツの若い頃の詩に出てくる土地を訪れ、最後に西の方、大西洋の海岸へゆく。海岸へ達したところには、雨は激しさをまし、西風も加わって、自動車の窓に叩きつける。強い風にあおられて、波は激しく海岸に打ちつけている。海岸には家が数軒、崖にへばりついたように建っている。きびしく長い冬のあいだの、この人たちのくらしは、生やさしいものではあるまい。それはまさに大自然との格闘であらう。ここを最後に、キョーハンは私を自分の家につれて帰り、夫人は私に午後のお茶を御馳走してくれた。午後のお茶といっても、もはや七時に近かった。

しかし私には、その後にもう一つの約束が残っていた。それは、午後八時に、今朝会ったミス・ナイランドと会うことであつた。それからどういふ予定なのか、私には皆目見当もつかなかったが、とにかく、キョーハン氏にふたたび図書館まで送ってもらふことにした。図書館につくと今度は、ミス・ナイランドが、私を小型車に乗せて、ハンドルを握った。目的地はロッシス岬ということである。ここはスライゴから西北へ約十五分ばかりの大西洋に直面した海岸だ。イエイ

ツの大伯父ウィリアム・ミドルトンの家が、この岬にあり、少年時代以来イエイツには、なじみの深いところである。今は、夏には海水浴場となり、またゴルフ・コースもあるという。そのホテルの一軒にイエイツ・カントリ・ホテルというのがある。ロッシス岬に到着したのは、午後八時半ごろだが、北国の海はまだ昏れやらず、灰色の海面を白い波濤が躍るように浜べにうちよせている。海岸の草原は、夏には絶好のゴルフ場になるというが、雨風に吹きつけられたこの浜べは、今はただ荒涼、見わたすかぎり灰色ひといろである。雨風を冒して、岬の先端まで歩いていった私は、ミス・ナイランドと共に、吹きとばされそうな一本の傘を支えて、しばし言葉もなく、灰色の海、灰色の浜を、じっと眺めていたのであつた。

ついで、ミス・ナイランドは、入江をグツと一廻りして、さらに北方にあるリサデルへと、自動車を走らせる。リサデルで思いだすのは詩集『廻り階段』の巻頭の詩の最初の四行である。

夕べの光り、リサデル

大きな窓は南に向つて開かれている

絹のキモノをきた二人の少女

共に美しく、その一人はかもしただ

今もそこには、二階建てのガッシリした邸宅が残っている。

イエイツはそれを「古いジョージ王朝風の邸」といつているが、一八三二年に建てられたそうである。邸は、木立にこまれて、ただ一軒建っているだけだが、南側だけは、立木が切り開かれ、海を見わたしている。来客の姿を見つけて、背の高い老夫婦が姿をあらわす。それが、かつての「絹のキモノをきた二人の少女」のうちの一人である。夫人は私たちを家のなかへ招き入れる。恐ろしく天井の高い大きな部屋が、幾室もあり、各室にはギッシリ絵がかけてある。まるで、美術館のようだが、建物も、絵画も、ひどく荒廃し、絵具の色つやは失せている。薄暗い電灯が、ところどころに灯っているだけで、暗闇のなかからは、先祖の亡霊が現れそうな感じがする。夫人は、絵画をいち説明していったが、夫人の亡き夫、マーキウィッツ伯のものが多かった。最後に夫人は南向きの居間の色あせた椅子に私たちを坐らせて、シェリー酒を御馳走してくれた。「かもしかのような美少女」と、今は齢おいた元伯爵夫人、かつては華かに照明されて、夜会が開かれたであろう広間と、蜘蛛の巣が下っていそうなうす暗い部屋——イエイツがもし今在世していて、このリサデルを訪れたら、どんなに、感慨を催したことであろうか。ミス・ナイルランドが、私をホテルに送りつけてくれたのは、午後九時半。しかし、ケルトの薄明はまだ微光を残していた。

翌五月一日は、からりと晴れ上って快晴。前夜おそく、ひとりのアイルランド人から、電話がかかってきて、今日正午頃、キョーハン氏の書店でお目にかかったのですが、御都

合よければ、明朝一緒に食事したい、と言ってきたので、今朝九時にホテルへ来てもらうことにしていた。それで、私は来客一人を期待していたら、電話をかけてきた当人のブラウン (Browne) 氏が、四十過ぎの男と、三十そこそこの美しい女性をつれて、ホテルに姿をあらわしたのは吃驚してしまった。その初対面の二人を、最初は夫婦かと思ったが、そうではなく、二人とも、日本という地球の果てから、イエイツを研究しているという変わった男が、はるばるやってきたそうだから、どんな男か、ちょっと見にゆこう、ということと、やってきたらしい。シングが在世なら、こういうのが、アイルランド人のオツチヨコチヨイだ、と言ったかもしれぬが、私は、アイルランド人は実に人なつこい国民だと、むしろ双手をさしのべて、彼らを歓迎したのである。殊に、ミセス・ジェネ (Gene) という美人は、生れはフランスだが、国籍はアメリカにあり、しかも、ニューヨークが大嫌いなので、一家全部アイルランドに引越し、昨日自動車で行ったグレンカー湖のそばに土地を買い、家を建てたという非常に変わった女性である。しかも、教育も、アメリカよりは、アイルランドの方がよいから、子供二人は、土地の学校に通わせているという。フランス人らしく、才気喚発、まことに魅力ある女性であった。さて、朝食後、ブラウン君は、どこへでも希望のところへ案内するというので、今日は快晴だから、昨晚のロッシス岬をふたたび見せてもらうことにし、彼のライトパンの運転台に同乗して出発する。快晴のロッシス岬は、昨晚

とはまったく様相を異にしていた。海からの微風、萌えだしてきた青草、黄色い可憐な草花——岬はすっかり春になっていた。しかし、私には昨晚のあのすさまじい灰色の海と空——これこそ、私のあこがれていた北国の海だと、胸おどらせて眺めていたあの感動の方が、はるかに強かったのである。後になって案内書を見ると、こう書いてあった。——「ロッシス岬を訪れる最良のときは、人の行かぬとき、つまり、冬とか、早春、夜明け、あるいは、満月の夜だ。」

岬から、自動車は、ふたたびグレンカー湖を訪れる。山すそののどやかなスロープ、そこに草をはむ羊、牛、藁屋根の田舎家、草地のなかに置き忘れたように残っている石の廃墟——昨日とは、打って変わったのどかな田園風景だ。そのなかを、ブラウン君は、すさまじいスピードでライトバンを飛ばすのであった。ホテルに帰ってから、ブラウン君を昼食に誘う。彼は、酒は自分がおごると言う。ゲーリック語で「健康」という言葉はシャンテ（Shante）だそうで、これを乾盃のときに使う。ブランドイのように香気の高いアイリッシュ・ウィスキーのグラスを上げながら、まず、この好青年に向って「シャンテ」というと、今度は、彼が、日本語で乾盃のときどういうか、教えてくれ、という。「カンパイ」と答えて、ローマ字の綴りを教えてやると、彼はカンパイと発音するのであった。ぜひ日本へ来たまえ、という、行きたいが、何しろ遠すぎると、彼もまた答えるのであった。午後二時十五分発の汽車で、ダブリンに向けて出発するので、ブラ

ウン君は、私の鞆を車につんで、駅まで送ってくれる。私の鞆を両手にさげて、車室のなかまでは入ってくると、大きな手をさしのべて、私の手を固く握っただけで、クルリと背を向けて、大股で立ち去っていった。私はその後姿を見まもっていたが、ジャンパー姿の彼は、後も振り向かずに改札口をおとって、外へ消えていった。こういう別れ方に比べると、満面に微笑をたたえ、手を振って名残りを惜しむといった別れ方は、かえって芝居じみて、実意がないのではなからうかと私は考えたのであった。スライゴオは始発駅だが、十分ほど遅れて、汽車は動きだした。わずか二日間の滞在ながら、このスライゴオは、人びとの好意と友情の思い出にみちた町であった。この町をふたたび訪れる機会は、もう私にはないかもしれぬ、と思うと、私は、五月の太陽に照らされたスライゴオの町を、私の脳裡に刻みつけるように、じっと最後まで見まもるのであった。

イエイツ・カントリといえば、アイルランド西部のスライゴオと、ゴート付近を指すらしいから、こちらで筆をおくべきかもしれぬ。しかし、私はこれからダブリンへ行き、そこで二日間滞在し、イエイツの旧宅などを訪れたので、そのことをも書きそえておきたい。スライゴオから、ダブリンまでは、汽車で四時間。美しい田園風景を眺めて、快適な旅であった。しかし、ダブリン郊外に近づくと、工場、煙突、汚ない建物など、もはや、それはありきたりの大都会でしかない。市の中心部にあるホテルに一泊した私は、翌朝、スライゴオ

のミス・ナイランドが紹介してくれたコラムという人に電話をかける。電話の声では、かなりな老人らしい。今風邪を引いて寝ているが、午後一時ごろにホテルにゆくといい。ホテルのロビーで会うと、赤ら顔で、白髪もマバラ、背丈は中より少し低い老人である。老人はウイスキーを注文してくれ、しばらくイエイツや、詩の話をする。そのうちに老人は、自分

は今日日本の能に興味をもち、それを真似た詩劇を作った。まだ印刷が完了していないのは残念だが、校正刷りを一部君にあげる、といいつて、*Moytura*と題する四〇ページばかりのものを取りだし、*Homage to Japan*と書いて、署名してくれた。実にウカツな話だが、私はようやくそれで初めて、このコラム氏が、あの有名な *Padraic Colum*

であることがわかったのである。コラム氏には、劇、小説などの作品も多いが、やはりその本領は詩であろう。一九六〇年には彼のアイルランドに関する詩を集めて *The Poet's Circuits* と題して、オクスフォード・プレスから出版され、すでに私も一冊持っていたのである。恐らく現存のアイルランド詩人としては第一人者であろう。彼は現在主としてニュ



Padraic Colum

ヨークに住み、毎年アイルランドを訪れるそうだが、折よく彼のダブリン滞在中に会うことができたわけである。しかも、あの有名な詩人が、気軽に私のホテルに、風邪をおしてまで足を運んでくれたのである。こういう気軽さ、人なつこさが、アイルランド人の一つの特色だ、と私は思う。イギリス人なら、とてもこうはいくまい。さて、コラム氏は私に、

ダブリンでは何を見たいか、と聞く。私は、まずイエイツには関係の深い市立美術館へゆきたいというと、気軽に立ち上って、美術館まで徒歩で案内してくれた。上の写真はその途中街頭でのスナップである。美術館は、ちょうど昼休みで閉っていたが、コラム氏は横の入口より館長室には入り、私を館長に紹介すると、別れを告げて帰っていった。

なお、その晩アベイ座にゆきたいというと、自分は風邪でいけぬが、電話をかけて、君のために切符を取っておくからということであった。当夜午後八時の開演前に、アベイ座（古いのは数年前に焼失し、現在改築中で、その間クイーンズ・シアターで上演していた）へゆくと、コラム氏から聞いています、といいつて、丁寧に案内してくれ、最良の席で見ること

とができた。当夜のだしものは、バーナード・ショオの「悪魔の弟子」であって、なかなか面白かった。帰国後しらべてみると、コラム氏は一八八一年生れだから、今年八十二歳。腰はシャンとしていて、とてもそう高齢とは思えなかったが、それにしても、風邪を押してまで未知の一外人である私のために、何かと配慮してくれたのであった。

市立美術館を訪れた目的は、例のヒュー・レインの絵画問題であったが、その詳細は省くことにして、ここではただ、レイン所蔵の絵画は、現在もロンドンのナショナル・ギャラリーに帰属しているが、その約半数が、借り出しの形式で、ここに陳列されていることを記しておきたい。ダブリンには、もう一つ、国立美術館というのがある。この方が、規模は大きく、イエイツの父親の絵も、数点陳列してあったが、この人はなかなかすぐれた画家である。国立美術館のすぐ前が Merion Square という広場になっている。それに面して、四階だての十八世紀風のガッシリした赤煉瓦の家が一つづきに並んでいる。手前の角が八〇番地だから、イエイツの住んでいた八二番地は三番目になる。玄関のドアは各一つだが、各階毎に別の家族が住んでいるから、八二番地だけで四軒になっているわけである。切角訪ねてきたのだから、誰かに会って話を聞こうと思い、まずその一つをノックする。中へはいると、何かの事務所らしく数人の人が忙しそうに働いている。用件を話すと、それなら、三階のバトラーさんが知っている、と、いって、三階へつれていってくれた。バトラー氏は壮年建築

家で、自分の父 Rudolf Allan Butler が、一九三二年にこの家を、イエイツから買いつつた、と説明する。著名な詩人の家に今自分が住んでいるのが、よほど自慢らしく、いろいろと話してくれる。時どきイエイツを偲ぶ人が訪れてくるらしいが、日本からの訪問者は珍しかったに違いない。大きな事務机に向って坐っていた氏の背後のマンテルピースには、イエイツの本が四冊おかれていた。なお、一軒おいて隣の八〇番地には、A・E、つまり、ジョージ・ラッセルが住んでいた、ということである。

(一九六三、八、一)